

# 山

## 山と向きあう

雪をかぶった茅葺民家の奥に船形連峰の峰を望む。升沢で一棟だけ残っていた茅葺屋根のままの家、棟にはりだした煙り出しと、家を囲むイグサ（屋敷林）の杉林が見える。



船形山



棚に積んだ薪木の雪



山に入る



雪レフ



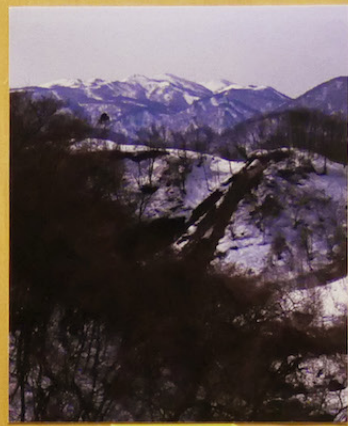
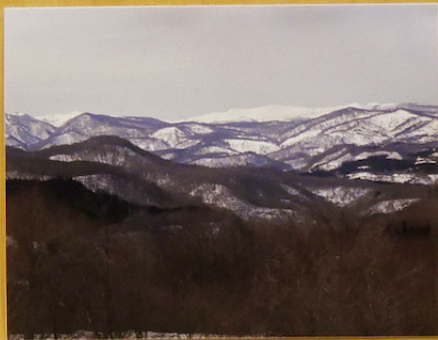
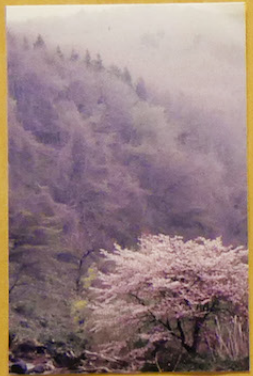
山に入る



マンアツ



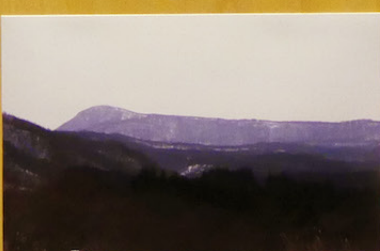
フキノトウ



三峰山



船形連峰



升沢は、山をわけた最奥の村である。そうした山にこもった中で人が生き抜いていくためには、山の厳しさと向きあい、山と村と人が折りあう形のなりわいをつねに求め続けなければならない。

升沢地区は船形連峰の東斜面、荒川の河原段丘上の狭い平地に位置し、標高は二五〇メートルから四〇〇メートルに及ぶ。そのため夏の気候は涼しく、冬に降り積もる雪はここから深い。村は落葉広葉樹の広大な森林に囲まれ、そこにはさまざまな動物が棲む。船形連峰の峰から流れる水を集めた豊かな河川に沿って、産からの湧水にも恵まれている。

升沢の人々はムラの歴史に著し田畑を耕し、そのまわりのヤマから薪炭などの燃料と薪、臼などの手作りの道具のために、いろいろな木々をつねに伐り出し、時には山菜・茸・蕨・皮・草などを採りに、年間を通して出入りした。そうした人が手をかけてあつたヤマのさらにまわりには、広々とした手つかずの原生林が広がっていた。人々はそこをオクヤマと呼び、ワサギ、アオシロ（カシノ）、コマ、パンドリ（ムササビ）などを求めて、鉄砲撃ちの男たちが森の奥に分け入った。

オクヤマの中心には広大なブナの原生林が広がっていた。そのほとんどは国有林であったが、昭和四十年代から林野庁によって原生林を買い取り林道が通され、ブナの伐採が急速に進み、昭和六十年代にはその過半が伐採されて多くは荒地となった。

\*「ブナの森」船形山のブナを守る会編「各号」「ブナの山々、東北の山からのメッセージ」(1986) 根津真はか著、白水社